平城宮の熨斗瓦

本稿の目的は、平城宮出土瓦のうち、これまで正面から取り上げられることが少なかった熨斗瓦について検討することである。本稿では熨斗瓦の分割手法と凹面にのこる枠板痕に着目して出土量と分布の傾向を分析する。

なお、今回分析対象としたのは、平城宮出土の熨斗瓦430点中、奈良時代のA類（後述）351点である。

分　類　まず分割手法に着目する。熨斗瓦は平瓦を1/2ないし1/3程度に分割して作る。焼成前に何らかの加工をするもの、つまり生瓦を切断、または工具で浅い切り込みを入れ、焼成後に分割するものをA類、分割のための加工をせず、焼成後に分割するものをB類とする。

しかしこの分類では、B類と平瓦の判別が困難である。半分に割れた平瓦と外見上区別できないし、小片になると全く見分けがつかない。B類は遺物として分別不能であるといわざるを得ず、いったん分析対象からはずす。

もう一つの分類視点は凹面の枠板痕で、これを残すものと枠板痕が認められないものを分けることにする。

出土量と分布の傾向　平城宮出土の熨斗瓦は、2003年12月時点で430点である。これは丸・平瓦に対して圧倒的に少ない数字で、軒瓦と比べてもかなり少ない。

対象とした351点中、凹面に枠板痕を残すものは257点ある。これは全体の73.2%を占め、調整が不明瞭なものを除くと、85.5%にのぼる（図36右上円グラフ）。

分布に注目すると、平城宮西南隅、平城宮東南隅、第一次朝堂院南辺、第一次大極殿院築地回廊にまとまりがある（図36）。このうち、宮東南隅に枠板痕が認められないものが集中し、平城宮全体でも、枠板痕を残さない熨斗瓦全体のほぼ半数がここから出土している。それ以外の地域では、枠板痕を残すものが圧倒的である。

考　察　まず、瓦全体に対して熨斗瓦の量がきわめて少ないことが注目される。これは荷札木簡や造営関連の文書に記された熨斗瓦（「堤瓦」）とその他の瓦の比率にも合わず、このままでは理解しがたい。このことは、分析対象としたA類が、実は圧倒的に少数派で、いったん分析から除外したB類が平瓦の中に大量に紛れており、熨斗瓦の大半を占めていることを暗示している（注）。

次に、枠板痕に注目する。凹面の枠板痕は一部の例外を除くと、桶巻き作りの際の模骨痕と解するのが一般的である。平城宮・京出土の軒平瓦や平瓦は、ほとんどが奈良時代初めに桶巻き作りから一枚作りに変化したとされる。凹面に枠板痕を残すものの多くは桶巻き作りで、奈良時代初頭かそれ以前の製品であるとみてよいだろう。熨斗瓦も基本的な技法は平瓦と共通しており、同様の変化があったものと推測される。

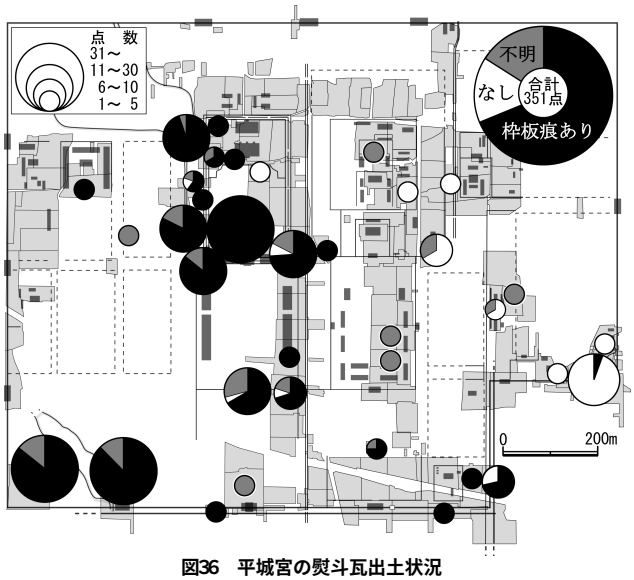

図36　平城宮の熨斗瓦出土状況

このように、A類のみを対象とした場合、出土量がきわめて少なく、奈良時代初頭かそれより前に製作された桶巻き作りの製品がほとんどである。しかし、奈良時代前半以降、つまり奈良時代の大半を占める時期に熨斗瓦の需要が低かったとは考えにくい。熨斗瓦は再利用率が高いと想定されるが、やはりそれ以降に製作されたものが相当量あるとみなければなるまい。その熨斗瓦は一枚作りで、多くはB類であったと推定できる。

まとめ　A類は奈良時代初頭かそれ以前に製作され、それ以降はB類が主流となる可能性が高い。A類には藤原宮出土平瓦と共通する特徴をもち、藤原宮から運ばれたとみられるものも含まれる。A類が集中出土したのは南面大垣、第一次大極殿院築地回廊、第一次朝堂院など、平城遷都時に特に造営が急がれたと推定される部分であることも注目される。平城遷都前後にA類が大量に供給され、その造営が一段落した後に製作、供給された熨斗瓦の主体がB類であったと解釈できるだろう。

（清野孝之）

注　平安京においても本稿のB類が多く用いられたことは、すでに上原真人が詳細に論じている（上原真人1988「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった」『歴史と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会）。